



水と火の祭

2015.8.1(土)

八雲町日吉親水公園
周藤彌兵衛翁像周辺

水と火の祭

水は生命の源。火は命をつなぐ力。

8月1日は「水の日」。この日、八雲町に治水の偉人・周藤彌兵衛翁の銅像が建立されて1周年を迎えます。これを記念し、水の神様、火の神様、そして先人に感謝し、平和を創る「水と火の祭」を開催いたします。

日本の発祥地ともいわれる古代出雲国の中心地・意宇郡(おうのこおり)を流れる「悠久の河」意宇川。かつて熊野大社の本宮があったとされる天狗山(熊野山)の湧き水を源流としています。古来、意宇川は氾濫を繰り返し、田畑・家屋を押し流し、人々の命を奪いました。

今から300年前、日吉村(現在の八雲町)の庄屋である周藤彌兵衛翁は私財を投じ、42年かけて剣山の硬い岩山を鑿と槌で切り開き、川の流れを変え、新田を開発し、洪水の苦しみから人々を救うために生涯を尽くしました。今も切通しの岩には鑿跡が残っています。

火の発祥の神社である熊野大社では、天狗山(熊野山)の檜で作られた「火きり臼」と卯ツ木で作られた「火きり杵」で神火をきり出すお祭りがあります。

出雲国造の代替わりのときに行われる「火継式」でも、熊野大社で起こされた火で調理された御食(みけ)をいただくことではじめて世継ぎがなされと考えられています。「火」は「霊(ひ)」と同一にみなされ、命の根源的な力とされています。

こうした八雲の歴史と伝統を受け、下記の要領にて「水と火と人の輪」をテーマに「水と火の祭」開催を企画いたしました。

八雲志人館

代 表：佐藤京子・小松昭夫 〒690-2102
事務局：交易場修・稲田幸子 松江市八雲町東岩坂 3442-9
広 報：寺戸良信 電話・FAX 0852-54-1023

周藤彌兵衛翁像制作：2002年9月 清原太兵衛像、孔子像、孟子像を同時制作(棗荘・台児荘)
周藤彌兵衛翁大銅像制作：2014年7月

ベルタ・フォン・ズットナー像制作：イングリッド・ロレマ
1号像 2013年9月(オランダ・ハーグ美術館展示)
2号像 2014年6月(ウィーン平和記念館貸し出し後、日本へ移送し日蘭合作へ)
3号像 2014年10月(小松電機産業株式会社本社ロビー展示 純蘭製)
4号像 2014年10月(小松電機産業株式会社本社ロビー展示 純国産)
5号像 2015年11月(富山県高岡市 全国伝統工芸展出品 純国産)

国産・日蘭合作ベルタ・フォン・ズットナー像制作：2015年7月
制作：株式会社嶋安(富山県高岡市)
後援：株式会社ミヤシゲテクノ宮重社長・石名田取締役営業部長、富山県庁商工労働部

本誌制作：小松電機産業株式会社 小林泰久 指導：小松昭夫社長

悠久の河
意字川

水と火と人の輪

水と火の祭

国藤彌兵衛翁銅像 建立1周年記念

平成27年 **8月1日** 土曜日

水の日

場所▶八雲町日吉親水公園
周藤彌兵衛翁銅像周辺

午後4時開場～午後8時

水の神様、火の神様、
そして先人に感謝し、
平和を創る「水と火の祭」を開催します。

お茶席
お抹茶サービス!

水飴
紙芝居の席では
お子様に水飴を
差し上げます。

かき氷
かき氷サービス!

火起こし体験

- 神事
- 餅まき
- 古代笛演奏
- 紙芝居
- 朗読
小泉八雲の世界
- 語り
私の8月15日
- 火起こし体験

雨天の場合は、
※日吉ふれあい会館で、
午後3時開場～午後6時

連絡先/代表:佐藤 090-4145-0231
事務局/交番増修 080-3008-6808
※催し物・内容は場合によって変更になることがあります。

■主催/八雲志人館
松江市八雲町東岩坂3442-9

協賛▶やくもまつり実行委員会・八雲ゆう人会
後援▶八雲公民館・まつえ南商工会八雲支部・日吉地区自治会連合会
熊野大社・山陰ケーブルビジョン株式会社・小松電機産業株式会社

8/1 土 2 日 午後8時～
宍道湖周辺

松江 水郷祭

湖上打上花火
松江水郷祭史上初の13000発!!

1日(土) 3000発 2日(日) 10000発

宍道湖の美しい湖面を生かした西日本最大級の
湖上花火大会として開催します。
宍道湖上の台船2隻から、連続斜め打ち、スターメイン、
尺玉連発など多彩な花火を次々に打ち上げます。

1日(土)が中止の場合は、2日(日)に13,000発。
2日(日)が中止の場合は、8月8日(土)に繰越と致します。

第16回
やくもまつり

8/14 金

おいでな祭

とき:13:00～21:30 ところ:八雲構造改善センター

大迫力の花火と、特設ステージでの
楽しいイベントが盛りだくさん!!

- 小雨決行(荒天時は8月15(土)に延期)
- 駐車場/300台 無料
山村広場サッカー場・市役所八雲支所・
八雲保育園・八雲幼稚園
- 問い合わせ先/やくもまつり実行委員会
0852-54-0839























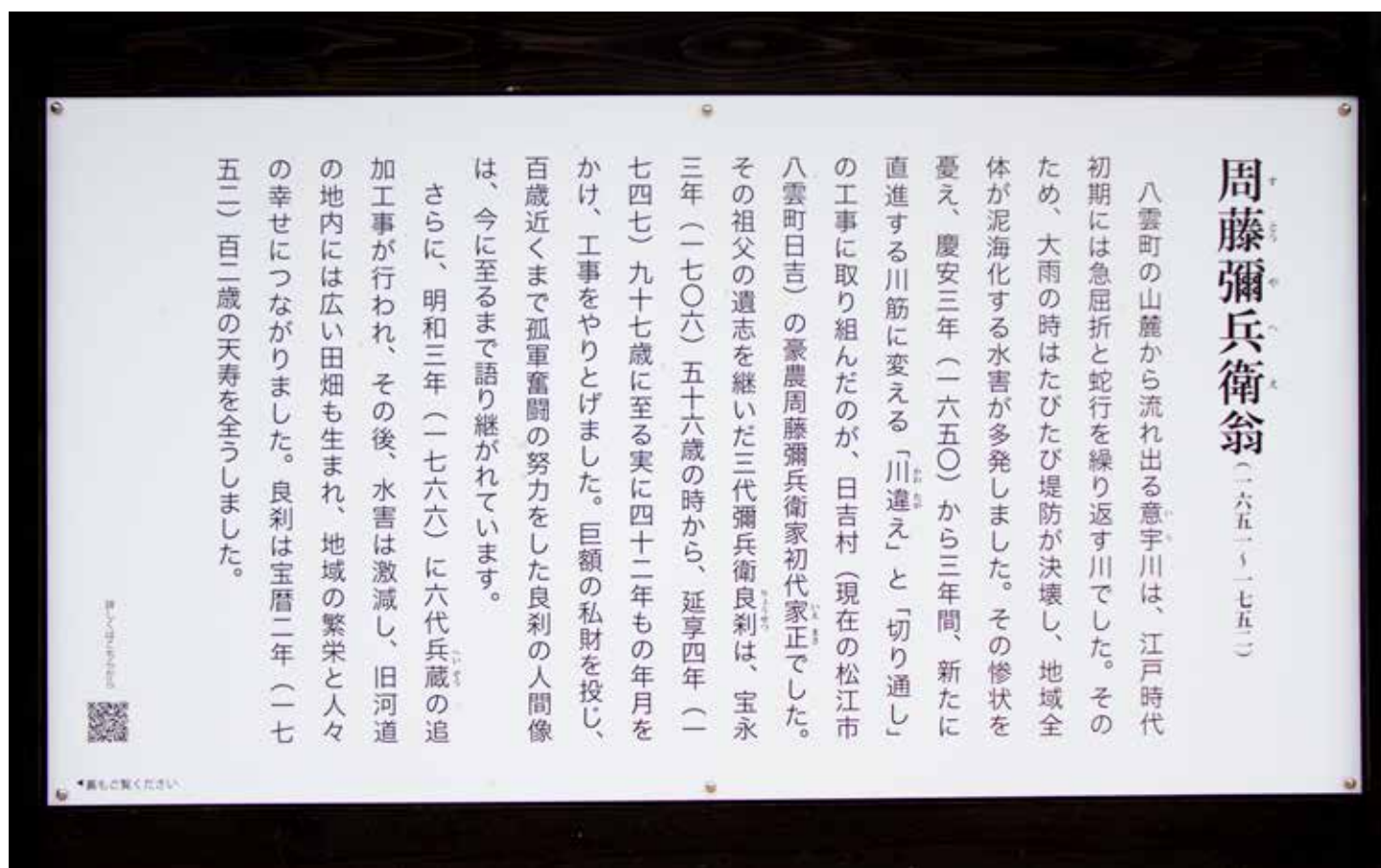






周藤彌兵衛翁像前看板 表

(島根県松江市八雲町 日吉親水公園)



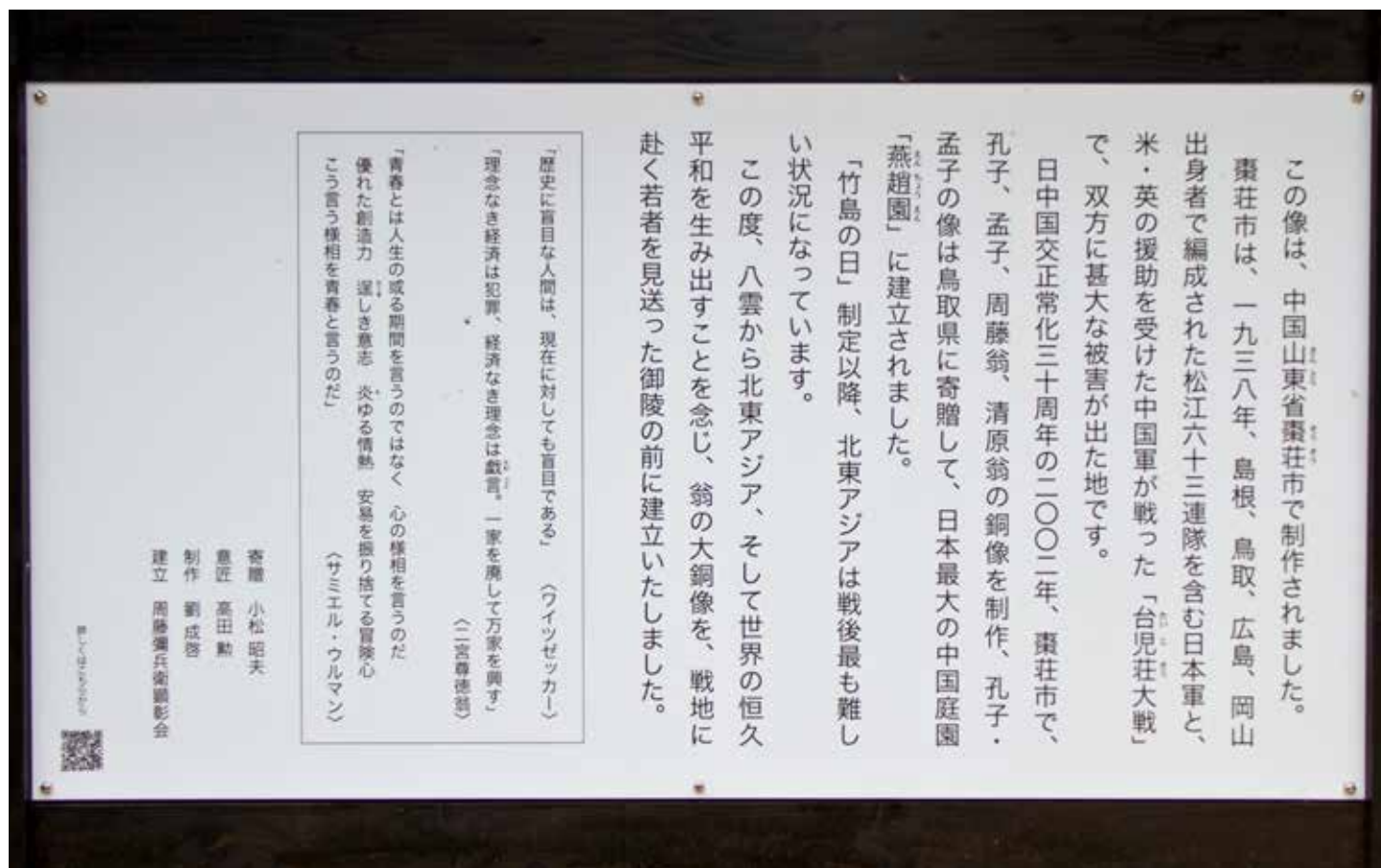
周藤彌兵衛翁 (1651 ~ 1752)

八雲町の山麓から流れ出る意宇(いう)川は、江戸時代初期には急屈折と蛇行を繰り返す川でした。そのため、大雨の時たびたび堤防が決壊し、地域全体が泥海化する水害が多発しました。その惨状を憂え、慶安三年(1650)から三年間、新たに直進する川筋に変える「川違え(かわたがえ)」と「切り通し」の工事に取り組んだのが、日吉村(現在の松江市八雲町日吉)の豪農周藤彌兵衛家初代家正(いえまさ)でした。その祖父の遺志を継いだ三代彌兵衛良利(りょうせつ)は、宝永三年(1706)五十六歳の時から、延享四年(1747)九十七歳に至る実に四十二年もの年月をかけ、工事をやりとげました。巨額の私財を投じ、百歳近くまで孤軍奮闘の努力をした良利の人間像は、今に至るまで語り継がれています。

さらに、明和三年(1766)に六代平蔵(へいざう)の追加工事が行われ、その後、水が激減し、旧河道の地内には広い田畑も生まれ、地域の繁栄と人々の幸せにつながりました。良利は宝暦二年(1752)百二歳の天寿を全うしました。

周藤彌兵衛翁像前看板 裏

(島根県松江市八雲町 日吉親水公園)



この像は、中国山東省棗荘市で制作されました。

棗荘市は 1938 年、島根、鳥取、広島、岡山出身者で編成された松江六十三連隊を含む日本軍と、米・英の援助を受けた中国軍が戦った「台兒莊大戦」で、双方に甚大な被害が出た地です。

日中国交正常化三十周年の 2002 年、棗荘市で、孔子、孟子、周藤翁、清原翁の銅像を制作、孔子・孟子の像は鳥取県に寄贈して、日本最大の中国庭園「燕趙園」に建立されました。

「竹島の日」制定以降、北東アジアは戦後最も難しい状況になっています。

この度、八雲から北東アジア、そして世界の恒久平和を生み出すことを念じ、翁の大銅像を、戦地に赴く若者を見送った御陵の前に建立いたしました。

「歴史に盲目な人間は、現在に対しても盲目である」＜ワイツゼッカー＞

「理念なき経済は犯罪、経済なき理念は戯言。一家を廃して万家を興す」＜二宮尊徳翁＞

「青春とは人生の或る期間を言うのではなく、心の様相を言うのだ

優れた想像力 逞しき意志 炎ゆる情熱 安易を捨てる冒険心

こう言う様相を青春というのだ」＜サミエル・ウルマン＞

寄贈 小松 昭夫

意匠 高田 勲

制作 劉 成啓

建立 小松電機産業株式会社 人間自然科学研究所







2014.2.21 銅像制作工場を視察



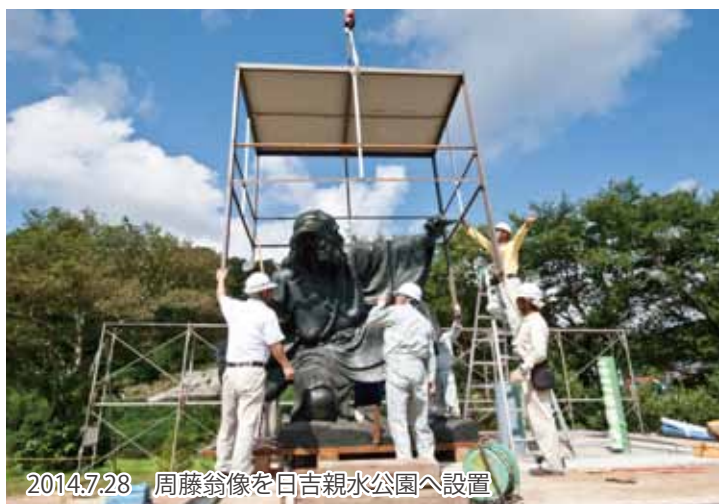
感銘の碑と目吉親水公園



2014.7.12 鍬入れ式



2014.7.15 周藤翁像が八雲工場へ搬入される



2014.7.28 周藤翁像を目吉親水公園へ設置





悠・遊・友、そして意宇
“志人道”を生きる



ゆう科学通信

Vol.1

June
6月

発行：八雲志人館

〒690-2102

島根県松江市八雲町東岩坂3442-9

電話・FAX 0852-54-1023

2015年6月 発行

一村一志

「夢の芽生える文化」創造のプラットフォーム
「八雲志人館」は、将来に向けて持続可能な
地域を創出することをめざして活動します。

何を「もって」いあわせと
いえるのでしょうか。

戦後七十年、「経済第一」でひた
走り続けてきた日本の大人社会を
振り返る時、「しあわせ」の基本を
子どもたちに伝えてきたといえるで
しょうか。

頻発する
青少年の犯
罪は、社会
構造の闇を
反映してい
るように思
えます。
本物を見
失い、何を
めざし、ど
のように生
きていけば
いいのか、
迷いと不安
の中で人々
は模索して
います。

日本人が世界の中で自律して生
きるためには、「心の豊かさ」とい
う価値観を大切にすべきではない
でしょうか。そして、正直に過去
と向き合い、学び、次世代に伝え
る役割が、今を生きる私たちにあ
ると考えます。



私たちは学びの場、交流の場、
情報受発信の場として、人が集い、
人が育ち「夢の芽生える文化」を
創造するプラットフォームとなるこ
とを目的とします。

私たちの拠点は島根県松江市八
雲町、古代出雲国の中心地である
意宇郡（おうのこおり）にあた
ります。

八雲という地域
には、古事記等に
記された神話・伝
承が数多く残され
ています。

地元の人が「御
陵さん」と呼ぶ、
国生みの祖・イザ
ナミノミコトの陵
墓があります。

スサノオノミコ
トが火起こしの方
法を伝えたといわ
れる、火の発祥の神
社として知られる
熊野大社（出雲国
一の宮）があります。

また近くには、現存する最古の
大社造りで、国宝になっている神
魂（かもす）神社（主祭神イザナミ
や、スサノオとその妻・イナダヒ
メがまつられ、縁結びで若い女性
たちに人気の八重垣神社など由緒
ある施設も数多くあります。

今から三百年ほど昔の江戸時代
に、出雲国日吉村（現在の島根県
松江市八雲町）の周藤彌兵衛翁は、
私財を投じ、五十六歳から九十七
歳まで四十二年間、硬い岩山の剣
山を切り続け、切り通しを完成さ
せ、洪水を繰り返す意宇川の流れ
を変え、村人を救うという志を貫
き通して、百二歳で大往生されま
した。

こうした地域の豊富な「資源」
を生かし、先人・偉人の志を継ぎ、
歴史に学び、智慧によって文化を
育み、世界の中で自律・持続でき
る地域社会の拠点づくりをめざし
て「八雲志人館」と名づけました。

広げよう「志人のネットワーク」

八雲を流れる意宇川の水は、汽
水湖の中海を経て日本海に注ぎ、
世界の海につながっています。そ
してやがて雲となり、雨となって
降り注ぎ、「水の惑星」といわれ
る地球を永劫に循環します。

そのように、八雲発の新しい「夢
の芽生える文化」が、各地域の志
ある人々へ次々に伝わり、「志人
のネットワーク」が世界中に広が
っていくことを念じています。

出雲は緊張する朝鮮半島の対岸
に位置します。歴史問題、領土問
題の発端となった竹島がありま



国生みの祖・イザナミノミコトの陵墓



熊野大社（出雲国一の宮）

◆誌名について

八世紀に編纂された『出雲国風土記』の冒
頭に、ヤツカミスオミヌタノミコトが新羅朝
鮮半島、隠岐の島、越（北陸）から土地を引
いてきて島根半島を作ったという「国引き神
話」が出てきます。「国引き」を終えたミコト
が杖を突き立て「オエ（意宇）」と叫んだので
「意宇（おうい）」という地名になったと
記されています。



周藤彌兵衛翁の像と切通し

◆「ゆう科学通信」

創刊号のご感想は？
この「通信」は皆様からのご意見、
情報を礎に発信していきます。

八雲志人館代表
佐藤 京子

悠・遊・友、そして意宇
“志人道”を生きる



ゆう科学通信

2015年8月7日発行

Vol.2

Aug.

8月

発行：八雲志人館

〒690-2102

島根県松江市八雲町東岩坂3442-9

電話・FAX 0852-54-1023

E-mail/shijinkan@bell.ocn.ne.jp

一村一志

「夢の芽生える文化」創造のプラットホーム
「八雲志人館」は、将来に向けて持続可能な
地域を創出することをめざして活動します。

八雲志人館は「水の日」の八月一日、松江市八雲町を流れる意宇川のほとり、治水の偉人・周藤彌兵衛翁銅像周辺で、「水と火の祭」を開催しました。会場には神事のための祭壇、女性初のノーベル平和賞受賞者ベ ルタ・フォン・スットナーの三体の像も設えられ、「水の神様、火の神様、そして先人に感謝し、平和を創る」という祭の趣旨を強く印象付けました。

水と火と人の輪 「水と火の祭」開催



午後四時に開場されると、参加者はふるまわれた抹茶で喉を潤し、かき水で火照った体を冷やしていました。
四時四十五分、火の発祥の神社として知られる「出雲国一の宮」熊野大社の熊野高裕宮司による神事が執り行われました。
神事の締めくくりに、榎野達夫さんによる古代の土笛演奏が、祭の開始を告げると、かんべの里



錦織明館長による紙芝居

の錦織明館長が自転車を引いて登場。周藤彌兵衛、松江城物語の二本の紙芝居を上演しました。配られた水飴をなめるのも忘れて立ち尽くし、物語に引き込まれる子どもの姿も見られました。

次は朗読の時間です。松江市文化協会が発行する情報誌「湖都松江」編集部が、小泉八雲没後百十周年にちなんで企画し、全国から募集した「新作怪談」その優秀作八編の一つに選ばれた「紅い傘」（原美代子作）を、小谷忠延さんが朗読しました。
続いて、「私の八月十五日」と題し、地元八雲町の方によって戦争体験が語られました。戦争当時、海軍少年飛行兵、いわゆる予科練だった小早川富夫さん（八十七歳・八雲町東岩坂）、国民学校高等科二



小早川富夫さん

年生の時に自宅で終戦を迎えた須山和子さん（八十三歳・八雲町熊野・代読須山マツ子さん）、満蒙開拓青少年義勇隊の一員として、旧満州で終戦後の苛酷な逃避行を体験した石原茂さん（八十六歳・八雲町熊野・代読小松光子さん）の三名の方が、それぞれの体験を披露。「戦争法案」が国会で審議され、平和が脅かされるようにしている昨今の時代状況の中、生々しい戦争の実態と、「平和こそ真の幸福の礎です。二度と戦争のない社会を実現するために努力することが、生き残った私の使命」（石原さん）といった厳粛な言葉に触れて、会場は静まり返りました。



次は、木と木をこすり合わせる古代の方法による、火起こし体験が行われました。棒を両手ではさんで、もむように回して火を起こす「もみぎり」、棒の下の方に取付けたはずみ車の回転力をうまく使って起こす「まいぎり」という二つの方法に親子で挑戦。木にうがたれた穴から煙が立ち上ると、拍手と歓声があふ



榎野達夫さん

れました。
午後七時、六基のかがり火が点火されました。火の粉が舞い上がり、彌兵衛翁像、スットナー像が炎に照らされ、宵闇に浮かび上がると、榎野さんの笛が再び会場に響き渡りました。
ある時には高く、大きく、ある時には小さく、優しく、また吹く風のように響き、「水の神様、火の神様、そして周藤彌兵衛翁にも届いたことでしょう」、司会者（北川美知子さん）がそう表現した見事な笛の音が大自然に染み入りました。



祭の最後に、小松電機産業株式会社・人間自然科学研究所の小松昭夫代表が、スットナーの「武器を捨てよ」、「空の野蠻化」などの著作を中心とする功績と、像制作の経緯、作者のイングリッド・レマさんについて説明。八月十五日の「終戦」を、人類の戦争を終わらせるという、私たち日本人の役割を宣言する言葉にしようと提言をされました。

◇寄せられた感想
会場全体が劇場型祭壇に
このたびは素晴らしい平和の祭典にご招待いただき、誠に有難うございました。どの企画もレベルが高くて、よく考えられており、感心すること頻りでした。猛暑の中、お疲れが生まれませんでしたでしょうか。

熊野大社の宮司さんによる神事から始まりましたが、確かに神が創った世界には核兵器などありませんでした。水と火をテーマに古代と現代を結びつける企画でしたが、現代に生きる我々の誤謬を「私の八月十五日」で強烈に示し、希望と勇気と知恵を四体の像で示すという「演出」は本当に素晴らしいかったです。

素晴らしい音楽や紙芝居もあり、会場全体が劇場型祭壇に変わりました。周りの山や川を含めると、まるで古代ギリシャやローマの円形劇場です。地にはかがり火、空には満月……。それらのまとめで、小松社長「和の文化創設」スビーチも胸に響くものがありました。本当に忘れられない一日になりました。重ねて御礼申し上げますとともに、今後のご発展、ご活躍を大いに期待しております。

中村新一郎

◇後記

「ゆう科学通信」は皆様からの意見、情報を礎に発信していきます。
・第二回「水と火の祭」には、さらに多くの地域の方々にご参加いただけるよう取り組んでまいります。
・次号より戦後七十周年記念企画「私の八月十五日」を連載します。



一村一志

「夢の芽生える文化」創造のプラットホーム
「八雲志人館」は、将来に向けて持続可能な
地域を創出することをめざして活動します。

戦後70周年記念企画

「私の八月十五日」

① ◆小早川富夫

(87歳・八雲町東岩坂)

昭和19年（1944年）春、私は海軍乙種飛行予科練生、いわゆる海軍少年飛行兵（略して予科練）を志願しました。16歳でした。最後の予科練生であつた私達第24期生は全国で9110名が採用され、最少は13歳8カ月、現在の中2年生在学中でした。

中核となりました。特別攻撃隊員となり、特攻機に250キロの爆弾を付け、片道の燃料だけを積んで敵の艦船への体当たりを遂行しました。予科練出身者の8割が亡くなりました。その多くは17歳から22歳であります。祖国の将来を少しも疑うこともなく、ただ救国の一念で、無限の未来を秘めた生涯を捧げたのです。これが戦争というものです。

隊について何も語らなかつた
出発前夜、それまで私の入
母が「行かないでくれ」と頼
みました。母は当時52歳、前
年に父が亡くなつていました。
時代は戦争一色で、男子は戦
争に必ず行くものと教育され
ていたとはいえ、母と十分な
相談もせず、また家族のこと
や家の生活など深く考えなか
つたことを、心から懺悔して
います。

私たち24期生は昭和20年（1945年）3月までは基礎訓練を受けていましたが、3月18日の大空襲で基地は壊滅的打撃を受け、機能を失ってしまいました。このため、4月上旬、24期生は海軍部隊へ分散、

転属されることになりました。

私が所属する分隊は、鹿児島県の南東部、大隅半島の中にある鹿児島航空基地に転属となりました。ここは九州南方に迫ったアメリカ艦隊より飛び立った爆撃機の九州全土への空爆の通過空域になっていたため、連日、昼夜を問わずすびりなしに敵機が飛来し、爆音が途絶えるのは早朝の3時間程度という状況でした。

この基地では、敵の本土上陸
近し、というところ、九州最
南端での本土決戦に対応する
ための備えが急ピッチで進め
られており、私たちは次々に
送られてくる大量の砲弾、銃
弾を備蓄のために横穴壕に運
び込むことから始め、やがて
高射砲陣地などを造る土木作
業に従事しました。基地の兵舎
格納庫、滑走路、砲台施設を

の都度、作業を中断し退避しなくてはならず、戦場そのものでも、敵機が突然現れ、急降下で機銃を打ちながら自分たちに向かって突っ込んでくるときは恐怖を感じたことはありません。爆弾を5メートルほどの至近距離に受け、伏せていた背中に爆弾により吹き上げられた大量の土をかぶり、しばらく立ち上がれなかったことを記憶しています。

8月15日はバラック兵舎の

中で迎えました。爆撃でラジ
オも壊れていたなので、終戦の
放送は聞いていません。17日
になって上官から「日本は負

けた、戦争が終わった」と知らされました。そして「間もなく敵が上陸してくる。君たちは自宅に向かつて、山に逃げてもよい。とにかく直ちにこの場を離れよ」との命令が下されました。中四国出身者の仲間5人と、最寄りの日豊本線志布志駅まで40キロの道のりを7時間かけて歩きまわした。持ち物は身の回り品と毛布だけ。食料は全くなく、皆帰りたい一心で空腹に耐え

ました。夕方、駅に到着しました。しばらくして到着した列車は超満員、見る見るうちに客車の屋根の上までいっばいになりました。諦めかけていた矢先、機関車の上が唯一空いているのを見つけ、機関車の上に毛布を敷いて座り、我慢することにしましたが、耳元の汽笛の音には閉口しました。

日豊本線は爆撃で線路が寸断されていたため、途中、夜中に何度も下車して次の発車駅まで歩くことを繰り返しました。空腹と不安の中でたどる着いた門司駅で、四国方面に帰る仲間と別れ一人になった私に、居合わせた陸軍の兵士が事情を聞いてきました。その兵士は「腹が減っているだろう、残りご飯でよかったら食べろ」と自分の飯盒を差し出してくれました。「地獄で仏に会ふ」とはこのことです。

② ◆須山 和子

(83歳・八雲町熊野)

太平洋戦争が始まった昭和16年（1941年）12月8日の朝は、冷たい霰（みぞれ）が降っていました。当時、私は9歳、国民学校の4年生でした。朝礼の時、校長先生が

した。朝礼の時、校長先生から日本が米英と開戦したお話があり、その後、全校児童が裸足で熊野大社へ行き、必勝祈願の参拝をしました。

年が明けると、軍隊へ召集されて出征する人が多くなり、武運長久の祈願祭や、道端で万歳を叫んで兵隊さんをお見送りする回数が増えていきました。

した。

私たちの学校生活も大きく変わり、勤労奉仕の作業が多くなりました。まず、校庭を開墾してサツマイモを作りました。それから各地区の出征



兵士のお宅の農作業の手伝いに行くようになり、自分の背たけくらいの鍬を背負子（しよこ）に入れて学校に通いました。

次第に授業時間が減り、朝一時間だけ授業だったり、授業がまったく無い日も増え、来る日も来る日も開塾などの作業に出ました。

学校から列を作つて目的地に向かう時は、「天に代わりて不義を討つ、忠勇無双の我が兵はなどと軍歌を歌いながら歩いたものです。

してしまつたことです。戦争が
終わつたのに、なぜ一緒に帰る
ことができなかったのか。悔や
んでも悔やみきれません。

戦争当時、世間知らずで、分別もなかった私を励まし、応援下さり、また大隊後、農業や家のこと、母をいろいろとお世話、ご援助いただいた近所の方々、地区の方々深く感謝しています。戦争が終わってからずっと、この気持ちをお忘れたことはありません。そして、これからも一生忘れません。

戦争は二度と繰り返してはなりません。

ゆう科学通信

2015年8月15日発行

2

戦後70周年記念企画

「私の八月十五日」

奉仕作業は行き先によって田圃打ちや草刈りなどいろいろでした。まだ小さかったため、家で農作業を手伝ったことがなかったの、いきなり田圃に連れて行かれた時は、ヒルに咬まれるなどつらい思いをしました。また、田圃への客土のために、背負子に土を入れて河原から運ぶ作業も、とても重くつらいものでした。

その頃、学校でも竹槍訓練が行われており、私たちが竹槍をかついで登校しました。また、下校の際には、敵機に見つからないように県道を避け、脇道や山道を選んで歩きました。防火訓練や避難訓練も盛んで、集団で下校する時、班長さんの「敵機来襲、伏せ」の号令で目と耳を指で押さえて道端に伏せ、「空襲警報解除」の号令で立ち上がり、家に帰ったものです。

とくにつらい思い出は村葬のことです。戦死された兵隊さんの葬儀は、小学校の講堂で村全体の葬儀として行われ、私も何回も参列しました。村葬は厳粛で印象深く、席順まで覚えています。「海行かば」の葬送曲の中、どこからともなくすすり泣きが洩れ、私も涙がこぼれました。その後、英霊のご自宅での葬送にも参列しましたが、本当につらく、悲しい思いをしました。

昭和20年（1945年）8月15日、終戦の日には家に居ました。国民学校高等科2年生になっていました。7月いっぱい田の草取りの奉仕作業に出ていましたが、8月に入ると、新型爆弾が広島に落ちたので登校しない

ように、このことで夏休みにな

っていました。ラジオの前に集まって重大放送を待っていました。ちょうどラジオが壊れていた隣の家のおじさんが「戦争、終わった」と、ぼつりとつぶやいて帰られたのを覚えてます。戦争に勝つために、勝つまではと子供心に信じていました。何事も戦争のためだからと組み込まれていき、「なぜ」と疑問をはさむことは許されず、ただ黙って言うことを聞くしかありませんでした。教育のおそろしさを、今にして痛感します。また、戦争のこわさは、人間のおろかさ、心の貧しさがむき出し

になることです。おかしな時代に巻き込まれたものだ、思い出すと腹の立つことが多々あります。でも、いつまでも腹を立てても仕方がないので、私は何が本当のことだったのかを知りたいいろいろな本を読むようになりました。

③ ◆石原 茂

（86歳・八雲町熊野）

昭和18年（1943年）3月、国民学校高等科2年の卒業を待たずに、私は満蒙開拓青少年義勇隊に入隊しました。15歳でした。

満蒙とは、当時日本の支配下にあった中国東北部の満州国と、現在の内モンゴル地区を指します。昭和6年（1931年）から昭和20年（1945年）までの14年間に国策として満蒙開拓団27万人が移住しました。このうちの3割に当たる8万6千人が青少年義勇隊でした。開拓・増産による日本本土への食料供給と、当時のソ連と満州国の国境警備が2大任務でした。

3月12日、熊野大社で安全祈願祭と壮行式があり、島根中隊



263名の結成式が行われる松江城二の丸広場に向けて出発しようとした時、熊野大社前のお店のおばさんが駆け寄ってきて私の手を握り「こんなにこまい子を満州なんかに行かせるなんて、まあなんとしたかわいそうなことだ」と言って涙を流されたことは今でも忘れません。

当時の出征軍人と同様、歓呼の声や旗の波に送られ松江駅を出発し、茨城県の内原訓練所に向かい、そこで2カ月の基礎訓練を受けました。

その後、下関から関釜（かんぶ）連絡船で釜山（プサン）に渡り、中国を北上し、目的地の満州国・勃利（ボツリ）訓練所に到着したのは昭和18年（1943年）5月15日のことでした。

それから1年後の昭和19年（1944年）2月には東安（トウアン）適正訓練所に移りました。ここは3分の1が満州国領、3分の2がソ連領という興凱（コウガイ）湖のほとりで、まさに国境の最前線でした。

広い大荒野の中で、故郷を遠く離れて暮らす、14歳、15歳の私たちが苦しかったのは「屯墾（とんけん）病」いわゆるホームシックでした。家族からの手紙や慰問の小包が届いた夜など宿舎の闇の中、あちこちからすすり泣きが聞こえてきました。

昭和20年（1945年）8月9日未明、私達を悲劇が襲いました。突如、ソ連軍が侵攻を始めたのです。湖からのソ連艦船の砲撃により訓練所の舎屋は破壊されました。それから山に分け入り、鉄道をいくつか突破する決死の逃避行となりました。

避難する日本人の群れは大地を這うアリの行列のようでした。それを目掛けてソ連空軍機が機銃掃射や爆撃を繰り返しました。弾丸が体をかすって私の服はボロボロになりました。

昭和19年（1944年）7月サイパン、8月にはグアムの日本軍が玉砕し満州に居た日本の関東軍は南方に送られる者が増えていきました。避難民の中に

は、夫に残された軍人の奥さんも含まれていました。3人の子供を連れた奥さんもおられ、疲労困憊して背負った子供を草むらの中に置き去りにせざるを得なくなる。夜になると狼が出て子供は食べられるかもしれないという状況です。運のいい子は中国人に拾われて養育される。それが今日、中国残留孤児といわれる人々です。

そんな地獄絵図のただ中で、8月15日の終戦を知りようもありませんでした。

横道河子（オウドウカシ）という所で、ソ連軍に収容されました。その時初めて、ソ連軍兵士から日本人通訳を通して「戦争は終わった、日本は負けた」と聞かされました。8月29日のことでした。

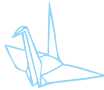
その後、海林（カイリン）に連れていかれ、仕事のできる者とそうでない婦女子の選別があり、仕事ができる者は皆、ソ連へ送られました。

我々は少年でしたので残されました。そこで3カ月ほど、関東軍が隠していた物資の搜索や積み出しをやらされました。

それから、私はハルビン（ハルビン）の収容所に入れられました。零下40度になる極寒の地で、ソ連軍兵士は時計をはじめ貴金属を取り上げ、日本女性を要求するなど横暴の限りを尽くしました。

「ゆう科学通信」は皆様からのご意見、情報を礎に発信していきます。ご投稿はメール、ファクスでお願いいたします。

「私の八月十五日」という題は、今人舎（村尾靖子）著「悠久の河―周藤彌兵衛翁物語」の版元 発行の書籍名を使用しています。



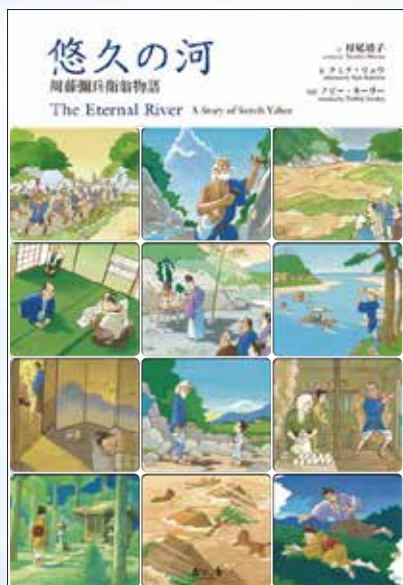
私たちは数多くの同胞を失いました。平和こそ真の幸福の礎です。二度と戦争のない社会を実現するために努力することが、生き残った私の使命であると固く信じています。

それから列車で島根に入り、宍道湖を見た時「やっと無事に帰った」という実感がこみ上げてきました。

山口県の仙崎港に帰り着いたのは昭和21年（1946年）7月30日でした。伝染病の検疫などのため、上陸できたのは1週間後でした。

2015
今人舎の近刊

誠実に事を成し遂げる日本人の素晴らしさを世界に!



たった1人で42年。

川の流れを変えた八雲立つ出雲の偉人・周藤彌兵衛の物語。

悠久の河

周藤彌兵衛翁物語

The Eternal River

A Story of Sutoh Yahee

文 村尾靖子

絵 クミタ・リュウ

英訳 ノビー・キーリー

全 79 頁 定価 2,500 円+税

2015年
絶賛
発売中



を見つめる彌兵衛の顔
八雲立つ山に立つ
た巴直村は、村々
にいた

一文ごとに
記号をつけて
対訳

at the past face of this
age came to Sutoh's mind
had stood on the banks
and lakes, rivers
has been and

42 年間 1 人で山をけずり、97 歳で切り通しを完成・暴れ川の流れを変えた偉人、周藤彌兵衛の物語。地元の作家、村尾靖子の文章に、漫画家クミタ・リュウが渾身の書き下ろし。日・英対訳。信念をもち、誠実に事を成し遂げる日本人の素晴らしさを、世界に英語で語ってほしい。そんな思いを込めた 1 冊。

●村尾靖子

作家。1944 年、山口県生まれ。結婚後、4 人の子育て中に執筆活動を開始。1994 年島根県文化奨励賞受賞。作品に『命を見つめて』『草原の風になりたい』（岩崎書店）、絵本『琴姫の涙』『おじちゃんせんせい だいたい だいたい すき』（今人舎）『クラウディアのいのり』（ポプラ社、日本絵本賞読者賞受賞）などがある。

●クミタ・リュウ

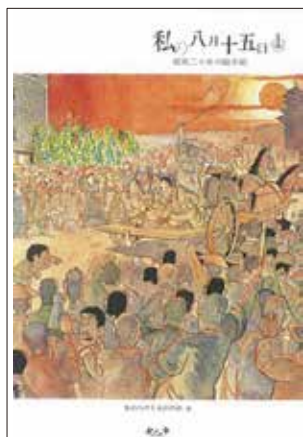
漫画家。1940 年、岐阜県生まれ。1975 年日本漫画家協会賞・優秀賞、同賞大賞、1977 年モントリオール国際漫画家展 1 位、1981 年読売国際漫画大賞、1988 年イギリス・ワディントン国際漫画家展 1 位など各賞受賞。東京新聞、中日新聞、共同通信に政治漫画を執筆中。日本漫画家協会理事。

●ノビー・キーリー (Nobby kealey)

イギリス・マンチェスター出身。シェフィールド大学にて日本語を専攻。来日後はカメラマンとして活躍する一方、英語教師のほか、その味のある容姿を生かし数々のテレビ CM に出演。現在松陰学園イングリッシュ・スクール校長。

私の八月十五日

昭和二十年の絵手紙



漫画家や著名人らが文と絵で語り継ぐ昭和二十年八月十五日・終戦の日の記憶集

ご寄稿者：

高倉健、黒柳徹子、松本零士、ちばてつや、林家木久扇 他 70 名以上

① 昭和二十年の絵手紙

著 / 私の八月十五日の会
全 64 頁

② 戦後七十年の肉声

編 / 8・15 朗読・収録プロジェクト実行委員会
全 48 頁

③ 戦後七十年を過ぎても

編 / 8・15 朗読・収録プロジェクト実行委員会

マンガ外交

南京大虐殺記念館からはじまった



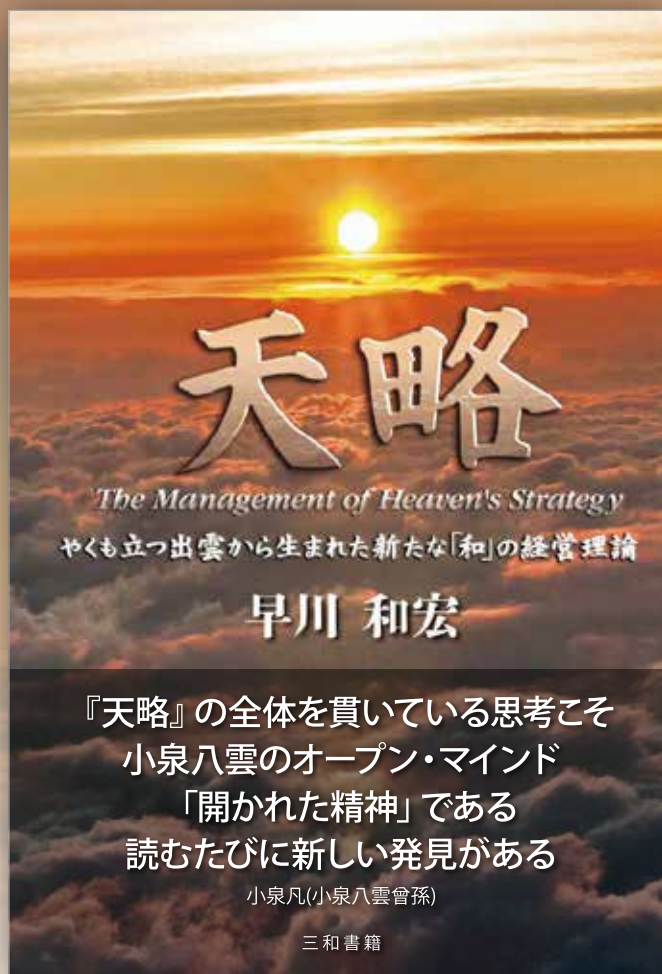
南京大虐殺記念館からはじまった 漫画家たちのマンガ外交。赤塚不二夫、ちばてつやら、幼年期を中国で過ごした引揚げ者である漫画家たちを中心に結成された「私の八月十五日の会」。同会の漫画家たちによって開催された南京市での「私の八月十五日展」を、エピソードを交えて紹介。

著 / 石川好 編集 / こどもくらぶ
全 144 頁

三和書籍
Sanwa co.,ltd.

戦後 70 年出版企画新刊

全国の主要書店または Amazon でお取り扱いしております。



世界のフィランソロピスト20人に ビル・ゲイツとともに選ばれた小松昭夫

天子経略とは、天子に求められる

もっとも理想的な治世を現実するための管理法・経営原理である

2013 年、オランダ・ハーグにある「平和宮」建立 100 周年を記念して「世界のフィランソロピスト（指導的慈善事業家）20 人」の選定が行われた。

選ばれたのは、平和宮の寄贈者でもある実業家アンドリュース・カーネギーをはじめ、アルフレッド・ノーベル、ヘンリー・フォード、J・D・ロックフェラーに加え、テッド・ターナー、ビル・ゲイツといった古今東西知らぬ者のない顔ぶれ。

そのなかに二人の日本人がいた。ひとり立命館大学平和ミュージアムの建設に寄与した平和運動の指導者で眼科医の中野信夫氏（故人）、そしてもうひとりが本書で焦点を当てる小松昭夫氏だ。小松氏は島根県松江市に本拠を置く小松電機産業株式会社の創業者。20 代の起業以来 40 年、自治体の水情報ビジネスや応用範囲の広いシートシャッターなどを手がけ、その前年、2012 年には「新産業創造」により藍綬褒章を受賞。一方で歴史問題を正面から捉え、地元出雲から隣国の韓国・中国、そして世界に交流の輪を広げ、平和の事業家としての活動を積み重ねてきた奇才。本書では、小松氏がみずから会得し、その行動の根幹をなす究極の思考・「天略」を軸に、この類い稀なる事業家の姿とあゆみを浮き彫りにする。

出版 三和書籍 著者 早川 和宏
全 440 頁 定価 2,500 円＋税

早川 和宏 （はやかわ かずひろ）

1948 年生まれ。立教大学経済学部にてマルクスの哲学および弁証法・マックスウェーバーの社会学を学ぶ。卒業後、社会派ジャーナリストとして活躍。心の変革、社会の変革を目標に掲げ、幅広いテーマに取り組んでいる。ひとりシンクタンク「2010」代表。

主要著書として『魔法の経営』『日の丸ベンチャー』（三和書籍）、『会社の品格は渋沢栄一から学んだ』（出版文化社）など。訳書として、ミナ・ドビック著『ミラクル』（洋泉社）。

出版予定書籍のご紹介

島根核発電所

原発 その光と影



安全なら電力消費の多い都市部に造るはずの原子力発電所は、日本では最新科学と電源三法の名のもとに過疎地に造られた。村上春樹氏は「原子力発電所を核発電所と呼ぼう」、ノーベル物理学者益川敏英氏は「科学者から見れば、原発は商業ベースに乗ってない技術」と言っている。

販売 三和書籍 出版 HNS 研究所
著者 山本 謙
編集 古浦 義己

全 370 頁 定価 2,500 円＋税

対立から共生へ

小松昭夫の「和の文化」の理念と実践



独特な起業家小松昭夫が衆知を集め、対立統合発展を繰り返し、世界の工場の環境改善に必要な不可欠なシートシャッター門番とクラウドの先駆け総合水管理システムやくも水神の2つの新市場を生み出した。その経験を活かし「和の文化」創造に挑戦する平和事業家へ

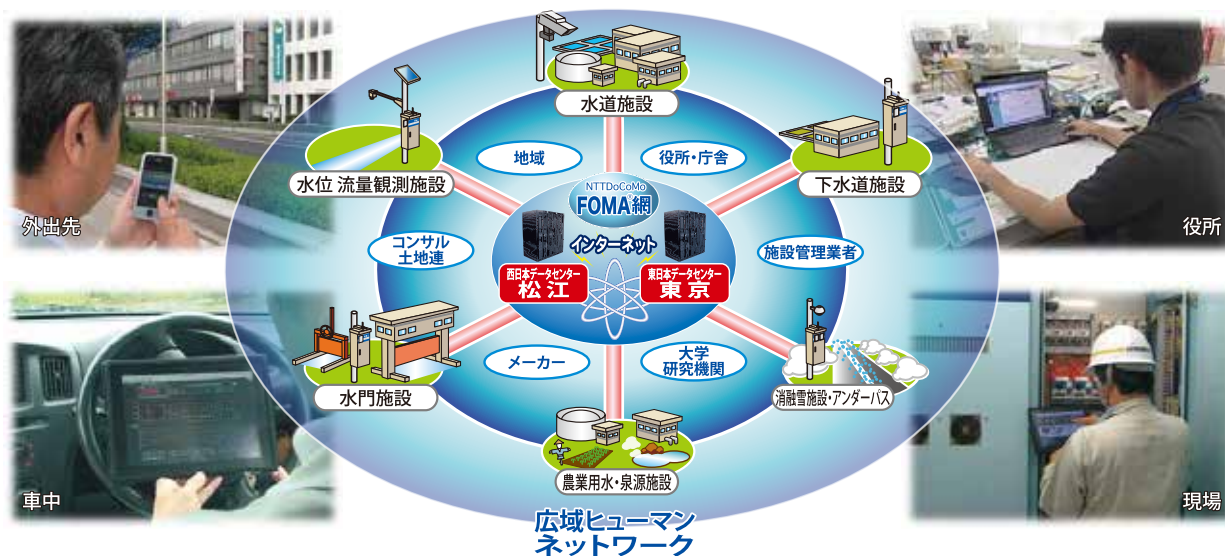
出版 北京學苑出版社
著者 張 可喜
編集 魏 亜玲

全 232 頁 定価 1,500 円＋税

2015年
10月
発売予定

※本誌は中国語で出版後、日本語翻訳し国内出版予定

特集 新展開を見せる中国経済圏



クラウド総合水管理システム『やくも水神』(概念図)

施設を遠隔管理に活用。また、東日本大震災では津波被害後にいち早く管理や制御が復旧するなど、今までのシステムでは考えられなかった機能を発揮し関係者に感動を与えています。先進的な全国の地方自治体職員の皆様と共創した結果生まれた総合水管理システム『やくも水神』は、官民連携のモデルであり、関係者の理解が得られ本格的に導入が進めば、劇的に全国、そして世界を変える『ビッグ地方創生モデル事業』になります。関心がある方々との新たな出会いを期待しています」と語る。

地球温暖化防止の「門番」ヒット

東証1部上場会社だった、農業機械メーカー佐藤造機(現・三菱農機)が、戦後の三大倒産といわれ会社更生法適用となった。同社の中央研究所の技術者だった小松氏は、73年に郷里の八雲村(現・松江市八雲町)で、ポンプの修理業で創業。

81年に同社を設立し4年後に、人や物が近づくセンサーが感知し、シートが瞬時に上がり、通過すると閉まるビニール製の『シートシャッター門番』を開発した。製造現場などで冷暖房や防風、防塵、防虫などの効果が劇的に高まることから爆発的なヒットとなり、91年に中小企業研究センター賞、第2回ニュービジネス大賞を受賞。92年の日韓首脳会談での要請を受け、小松社長は韓国企業に製造技術の無償供与を決断し、11年に現地法人「KOMATSUK OREA」(ソウル市)を設立した。12年には新開発の『happy gate 門番システム』が、ものづくり日本大賞優秀賞を受賞。

「空間価値創造」のキャッチフレーズの通り、「外気と触れる面は防虫、室内は誘虫」の画期的な機能がある、3社共同開発の『マジックオプトロン門番』、壁面がなくても施工でき、パーテーションなどへの応用が自在な『自立型門番』、静粛性が飛躍的に向上、新市場創造につながるといわれる『門番チューブ』と、その用途は、さらなる広がりを見せている。

IoTの「第4次産業革命」に挑戦

本質的な社会問題が生まれた経緯と背景を研究、正面から受

け止め、商材を開発し順序を踏み仕掛けて待ち、マーケティングを創造する。開発に1のパワーが必要だとすれば、その量産化には10倍、マーケティングを新しく生み出すには100倍のパワーが必要だと語る。こうした開発と事業の歴史は同社のホームページに動画も含めて詳しく掲載されている。

悠久の縁結びの国出雲が生んだ稀代の起業家・小松社長は、2つの世界的な製品開発と四半世紀に及ぶ研究所の実績を背景に「門番で地球温暖化を防止し、『水』を制する者は天下を制す」ではないが、やくも水神で水の情報をクラウド制御することによって、世界平和のプラットホームが築ける。これからは大学や大企業、各種団体とコラボレーションし、持続的な社会インフラ事業となる『ジャパンモデル』を確立したい。『8月15日を終戦記念日と定めた日本は、人類の戦争を終わらせる使命を持った国家』として戦後70年を契機に定義すれば、日本人のアイデンティティを確立することができ、安全保障政策につながり、人類進化の役割を果たし得る」と熱く語る。

IoT、「第4次産業革命」に挑戦していく究極のハイコンセプトな事業展開が注目される。



世界に先駆けクラウド総合水管理システム『やくも水神』で、悠久の平和を提唱

ハイコンセプトな事業展開が注目

小松電機産業

1985年発売、国内外に15万台以上設置されている『シートシャッター門番』。92年発売、現在では46都道府県380自治体・8400施設に導入されているクラウドの先駆け、総合水管理システム『やくも水神』。この2大ヒット製品を開発したのが、小松電機産業(株)(本社・松江市)だ。さらに、94年シンク&ドウタンク人間自然科学研究所(本部・同市)を設立。心の進化を促す社会インフラ事業を通して世界平和のプラットホーム創りを提唱、これを経営の根幹に据える異色の起業家・小松昭夫、代表取締役社長兼研究所理事長に、その経営と開発コンセプトを聞いた。

東日本大震災で『やくも水神』が再評価

高度成長期に敷設した「上下水道設備の老朽化」「財政難」や「職員の削減」が緊急課題になっており、合併などで広域化した自治体にとって更新や再設計が急務となっている。

『やくも水神』は、上下水道施



小松昭夫社長

設を始め、農工業用水、雨水、消雪、ゲート、温泉水などあらゆる水関連施設の管理を世界および全国規模でタブレットやスマホ、PCから遠隔制御管理できるシステムである。

2000年、『やくも水神』はそれまでのNTT専用線による監視から、ドコモの携帯電話、ネット通信網に転向し、今でいうクラウドコンピューティングによる世界初の総合水管理システムを出雲から全国展開を始めた。

03年に、当時ほぼ無名の松江発のプログラミング言語「Ruby」で、システムを刷新。また、データセンタを松江と東京の東西2拠点

に設け、高い安全性とセキュリティを実現させた。

2010年、iPadの日本発売にあわせ、いち早くタブレットPC、スマホで管理できるようシステムを再構築、ジャーナリスト大河原克行氏による報道と池上彰氏が司会をした野村総研「未来創発フォーラム」(10年7月、出席者名古屋1700人、東京2700人)で「次なる社会インフラ」として社会システムコンサルティング部長の神尾文彦氏が発表した。

さらに採用自治体の長崎市と兵庫県多可町が国交省のICT成功モデルと紹介され、よく知られるようになり普及が加速化した。

01年からマンホールポンプの制御に『やくも水神』を導入した東京都町田市は、庁舎内のパソコンで遠隔制御し、大震災後の計画停電前に流入量の多い施設を中心にマンホールの汚水をあらかじめ圧送し迅速な対応ができた。津波で死者もでた水門管理の教訓から、このシステムを使ったゲートの遠隔開閉管理も始まっている。

また、ゲリラ豪雨などによる雨水の急激な増加は都市部にとつて、地下街への流入など深刻な問題になっている。東京都武蔵野市は、昨年からは『やくも水神』による雨水管理にシステムを導入し、管理者の利便性の向上はもちろんのこと、市民がいつでも、雨水の今、を見る事ができるように、ホームページで管理状況を公開した。

今年1月、1市6町が合併した鹿児島県霧島市は、大手電機メーカーが構築していた既存のシステムを撤去し大幅なコストダウンと広域的な遠隔制御が可能な『やくも水神』の導入を決定した。総合水管理について小松氏は、「北陸では道路の雪をとくす消雪



「happy gate門番」



氷と火の祭

八雲志人館



一般財団法人

人間自然科学研究所

<http://www.hns.gr.jp/>

〒 690-0046 島根県松江市乃木福富町 735-188
TEL : 050-3161-2490 FAX : 050-3161-3846

無断転載禁止

No reproduction or
republication without written
permission.

ver.20160428 y.kobayashi